

令和 3 年度

実践報告書

岩倉市日本語適応指導教室

目 次

■各校の取組

4 月	実践報告(1)	日本語教室お楽しみ会	(南小)	P5
5 月	実践報告(2)	外国人向け進路説明会	(岩中)	P6
7 月	実践報告(3)	外国人保護者向け進路説明会	(南部中)	P7
	実践報告(4)	七夕会	(五条川小)	P8
	実践報告(5)	国際理解集会 (パキスタン)	(南部中)	P9
	実践報告(6)	漢字カルタ大会	(南小)	P10
	実践報告(7)	夏休み宿題会	(五条川小)	P11
	実践報告(8)	スピーチコンテスト	(東小)	P12
	実践報告(9)	高等学校訪問	(中学校部会)	P13
10 月	実践報告(10)	国際理解イベント「ワールドウィーク」	(東小)	P14
	実践報告(11)	日本語能力試験 N2 合格表彰	(五条川小)	P15
12 月	実践報告(12)	国際理解集会	(五条川小)	P16
	実践報告(13)	日本語教室 お楽しみ会	(曾野小)	P17
	実践報告(14)	漢字カルタ大会(2)	(南小)	P18
	実践報告(15)	日本語教室 クリスマス会	(南小)	P19
	実践報告(16)	冬休み宿題会	(五条川小)	P20
2 月	実践報告(17)	国際理解集会～南小から世界旅行へ出かけよう～	(南小)	P21
	実践報告(18)	外国人向け入学説明会	(岩中)	P22
	実践報告(19)	外国人のための入学説明会 (児童向け)	(南部中)	P23
	実践報告(20)	外国人児童向け入学説明会	(北小)	P24
	実践報告(21)	日本語能力試験 合格者表彰	(北小)	P25
	実践報告(22)	日本語能力試験 N1 合格表彰	(五条川小)	P26

■学習支援

実践報告(1)	学校生活適応支援／学習支援	(五条川小／勝田 千陽)	P29
実践報告(2)	学習支援	(東小／徳光 将夫)	P30
実践報告(3)	進学を前提とした進路指導	(岩中／谷 朋美)	P31
実践報告(4)	学習支援	(曾野小／松本 知子)	P32
実践報告(5)	学習支援	(岩中／穴井 香)	P33
実践報告(6)	学習支援	(東小／鬼頭 杏奈)	P34
実践報告(7)	学習支援	(北小／真藤 渉)	P35
実践報告(8)	学習支援	(岩中／油浅 重里)	P36
実践報告(9)	授業公開 実践報告	(東小／稲田 真人)	P37
実践報告(10)	授業公開 実践報告	(東小／加納 一城)	P38
実践報告(11)	授業公開 実践報告	(南小／渡邊 英利子)	P40
実践報告(12)	授業公開 実践報告	(南部中／加藤 洋子)	P42
実践報告(13)	授業公開 実践報告	(南部中／前田 栄子)	P44
実践報告(14)	授業公開 実践報告	(南部中／海野 怜子)	P46

◎ 視察・講師依頼 問い合わせ	令和3年度	P48
-----------------	-------	-----

各校の取組

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(1)			
会場	岩倉南小学校	実践日時	令和3年4月28日
実践名	日本語教室お楽しみ会		

1 出席者

- ・日本語の取り出しをしている全児童(計 19名)

1年-5名、

2年-3名、

3年-6名、

4年-2名(1名欠席)、

5年-2名、

6年-1名

2 実践内容

今年度新たに日本語教室に通う児童たちの初顔合わせの場として、お楽しみ会を開催した。5年生が司会進行を行い、6年生、4年生の代表児童が挨拶を行った。1年生は指導時間に作成した自作の名刺を使って、ペア学年のお兄さんお姉さんと挨拶をし、お互いの名前を覚えるきっかけとした。また、ブラジルチームとフィリピンチームに分かれて、国旗の貼ってある大判カードを時間内にオセロのようにひっくり返して数を競うゲームを行った。

- ・日本語教室に新たに通う、新1年生の紹介(兜のプレゼント)
- ・ペア学年での交流(名刺交換)
- ・チーム対抗ゲーム(国旗陣取りゲーム)

3 成果(感想)

日本語教室に通う児童全員が顔を合わせて、お互いを知ることができた。また、1年生には日本語教室という場所や仲間を知る機会とすることができた。校長先生の配慮で掃除時間を免除していただき、30分の時間をもらっていたが、ゲームの時間は短かったため、次回以降、交流時間をメインとした活動に取り組みたい。司会、挨拶など児童それぞれに役割を持たせることで、自分たちで会を運営することができるように今後も改善していきたい。



〈1年生の紹介の様子〉



〈ペアでの名刺交換の様子〉



〈国旗陣取りゲームの様子〉

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(2)			
学校名	岩倉中学校	実践日時	令和3年5月29日
実践名	外国人向け進路説明会		
1 対象 3年生の外国にルーツをもつ生徒の保護者2名 2 実践内容 ① 進路選択の流れ ② 上級学校の種類の紹介 ③ 高校進学に必要なこと(学校生活で気をつけること) ④ 学費について(助成金の説明) 3 成果(感想) 中学校卒業後の進路にどのようなものがあるか説明した。また、特に希望者の多い上級学校の進学に関して、学校の種類やメリット・デメリット、進路決定の流れについてスライドを使って説明した。 本来は生徒と保護者、両方に聞いてほしい内容だったが、コロナ禍の影響により保護者のみとなってしまった。生徒には、日本語教室の授業内で説明していきたい。スライドで説明した中で、特に学費については大きな出費となるので、いまから準備を始めてほしいことを強調して伝えることができた。 今後も生徒・保護者、双方が納得できる進路選択をサポートしていきたい。			
 			

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(3)			
会場	南部中学校	実践日時	令和3年7月2日
実践名	外国人保護者向け進路説明会		

1 対象

南部中学校外国人保護者 5名

2 実践内容

(1) 進路説明

- ① 日本の教育制度について
- ② 上級学校の種類について
- ③ 受験制度について
- ④ 学費について

(2) 卒業生からのビデオメッセージ(2名)

- ・ 岩倉総合高校
- ・ 古知野高校 定時制

3 成果(感想)

毎年、南部中学校では学校主催の進路説明会終了後に「外国人向け進路説明会」を行っている。しかし今年も昨年に引き続き新型コロナウイルスの感染拡大懸念により延期となり、開催は5月から7月にずれ込んだ。保護者会と近い日にちでの開催になってしまった関係で、参加者は5名にとどまった。

日本の上級学校について、情報がほとんど無いため、外国人保護者にとっては進路選択が限られてしまう。また学費についても助成金の拡充について知らなかった保護者も多かったため、熱心にメモを取っていた。今年度は保護者の国籍が全て異なっており、多言語の対応も難しいため、スライドで絵やカレンダーなどを用いて対応した。多くの情報から更なる質問も飛び交い、関心と知識が深まった様子だった。

今後は3年生だけでなく、2,3年生対象にして情報を広く伝えることが効果的であると考えられる。




様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(4)			
会場	五条川小学校	実践日時	令和3年7月7日
実践名	七夕会		

1 参加者

1～6年生児童(計 12名)

・1年－1名、2年－5名、3年－1名、4年－2名、5年－1名、6年－2名

2 実践内容

- ① 短冊に願いを書く。
- ② ペープサート劇に出演する児童が何回も練習を重ねる。
- ③ 出演する児童が七夕会の招待状を書き、児童に配る。
- ④ 当日、中高学年の児童が、ホワイトボードを飾ったり、いすのセッティングをしたりした。
- ⑤ 参加者が入場。
- ⑥ 七夕にまつわる話をペープサートで演じる。
- ⑦ 自分の短冊のついた笹を持ち帰り、家に飾る。

3 成果(感想)

家族の健康を願う児童、家族の温かな生活や幸せを願う児童の短冊が今年度はたくさんあった。2年も続いているコロナ禍で、児童の願いが変化しているのを感じた。それらの短冊を見ると家庭の様子や児童の心理状態を想像することができ、保護者や児童への支援の仕方も変えていく必要があると思われた。おり姫とひこ星のペープサート劇は、放課に練習を重ね、当日は、感情が現れるように工夫して動かしながら演じる中で、その劇を楽しそうに笑いながら見ている児童の様子から日本語教室の温かな絆・仲間意識を感じることができた。出演者が招待状を書き、配りに行く様子を見てみると、楽しんでいる側から企画運営する側になって、一生懸命活動している児童に大きな成長を感じた。

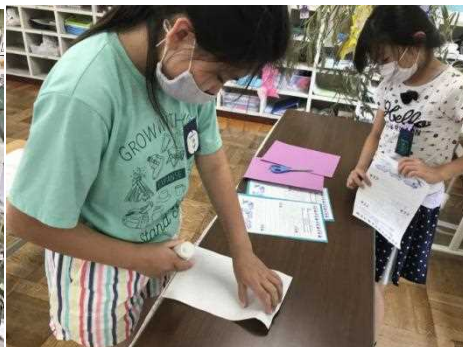
参加者の感想

- ・ ペープサートの劇はおもしろかった。私も動かしてみたい。
- ・ 来年は、ぼくがひこ星をやる。
- ・ 放課に何度も練習して、練習風景を動画に撮って、仲間と楽しくできた。

〈短冊を飾っている様子〉

〈招待状を作っている様子〉

〈ペープサート劇の招待を受けた児童〉



様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(5)			
会場	南部中学校	実践日時	令和3年7月16日
実践名	国際理解集会(パキスタン)		

1 発表者

南部中学校3年生 パキスタン出身生徒 3名

日本語担当 2名

2 目的

南部中学校には現在パキスタンにルーツを持つ生徒が9名在籍しており、そのほとんどはイスラム教徒である。日本とは大きく異なるパキスタンの文化を他の生徒に知ってもらうことにより、イスラム教を信仰する生徒が円滑に学校生活を送れることと、日本人の生徒が異文化を知り豊かな共生生活をすることを目的とした。

3 内容

- ① ラマダンについて
- ② パキスタンの食事について
- ③ ヒジャーブ(頭をかくすこと)について

4 成果(感想)

- ・ 3名とも日本語の発音が上手で、話している内容も理解することができた。ラマダンは飲食を断つのだが、特に、水分を取ることができないのは大変だと思った。パキスタンの食べ物はとてもおいしそうで、ビリヤニやデザートは食べてみたいと思った。
- ・ ヒジャーブの話では、「神様のため」という意味が込められているということを初めて知り、とても驚いた。クイズ形式にしていたのも良かった。
- ・ パキスタンについて、今まで疑問に思っていた事が理解でき良かった。




様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(6)			
会場	岩倉南小学校	実践日時	令和3年7月16日
実践名	漢字カルタ大会		
1 出席者 2年生漢字学習をしている3,4年生児童(計 8名) ・3年-6名、4年-2名 2 実践内容 外国人児童にとって漢字の習得は難しく、いかに学習の意欲付けを行うかが課題である。南小の日本語教室では、日本語教室での指導始めに彼らの学習進度に合わせた漢字テストを行っている。毎日、課題としている宿題もテストと同じプリントを渡している。4月から2年生の漢字学習に取り組んでいる児童が複数おり、今回は1学期の総まとめとしてカルタ大会を行った。4人で1チームとし、チームでA4サイズのカルタ80枚を取り合った。定着の低い児童に対しては、プロジェクターに問題を映し出すという配慮も行った。 3 成果(感想) 同じ日本語教室に通う児童でも、指導時間が異なるためなかなか一緒に活動をする事ができないため、授業時間を調整してこのような会を設けることにとても意義を感じた。日々の漢字テストでは、ギリギリで合格している児童であってもゲームとなれば真剣にヒントを見て探そうとする姿が見られ、遊びを通して学ぶことの大切さを感じた。また、チーム戦としたことで、カードを取る場所を工夫したり、メンバーに作戦を指示したり、同じチームのメンバーがカードを取れたことを自分のことのように喜ぶ姿を見られたりと、学習成果以上の児童の成長を見ることができた。			
			
〈カルタを取ってる様子〉		〈2チーム全員が賞状を受け取ってポーズ〉	

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(7)			
会場	五条川小学校	実践日時	令和3年7月21日～8月19日 9時～11時30分 全7回
実践名	夏休み宿題会		

1 参加者

取り出し指導をしている児童(計 8名)

・ 1年－1名、2年－5名、3年－1名、4年－2名、5年－1名

2 実践内容

保護者会の時に、夏休みの宿題会の日程と送迎等の同意書の文書を配布した。児童クラブの児童は日本語担当が送迎をすることになった。夏休みに入る前、学年毎に夏休みの宿題を確認し、自ら宿題一覧表に書き出した。夏休みの宿題全てを一つの袋にまとめ、宿題が一目でわかるようにした。宿題は、提出必須のポスター、工作、習字から取り組んだ。作品ができあがった児童は、日誌等の宿題をした。ポスターは、絵の得意な高学年がサポートしている姿が見られた。現学年の内容が難しい児童には、1学期に学習した内容を復習できるプリントを用意した。

3 成果(感想)

毎年恒例の宿題会であるが、今回は自分で作成した宿題リストを見て自ら宿題の優先順位をつけて取り組んでいった。一つの作品が出来上がる毎に、教室内で、「上手にできたね。」「習字うまいね。」などの声が飛び交っていた。自分の学年の宿題だけではなく他の児童が取り組んでいる事も見られるのが良い点である。きっと次の年に活かせるのではないだろうか。日本語教室の児童の仲の良さを感じた。朝、日本語教室に入る前に、職員室であいさつ、帰るときもあいさつ。教室では小さな声しか出ない児童も、みんなにつられて大きな声でのあいさつ。きっと自信に繋がっていくのだと思う。長い夏休みの間、7日間は、みんなで勉強ができて楽しい思い出になったことだろう。

児童・保護者の感想

・ 学校に来て宿題をするのは楽しい。一人でやるよりみんなとやった方がきちんとできる。

・ 家で教える事ができず、宿題会を開いてもらい感謝している。宿題会があるので、規則正しい生活が送れている。(保護者)



様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(8)			
会場	岩倉東小学校	実践日時	令和3年7月26日
実践名	スピーチコンテスト		

1 参加者

岩倉東小学校5年生2名 A(日本生まれ)ブラジル国籍、B(5才来日)インドネシア国籍

児童Aは日本生まれでブラジルにルーツをもち、児童Bはインドネシアにルーツをもつ。日本語適応指導教室ではステップ3の学習内容に取り組んでいる。児童Aは、「日本とブラジルをつなぐ」、児童Bは、「アナンダがんばってね」というタイトルでスピーチコンテストに応募し、本選に出場を決めた。

2 実践内容

2018年度から継続して、「外国人県民による多文化共生日本語スピーチコンテスト」への参加者を募り、本年度は、3名が応募し、5年生2名(児童A・B)がコンテスト本選に出場が決定した。

4月～6月中旬までの短い期間で教員の支援を得ながら、児童がルーツをもつ国や日本の小学校に関連付けて、スピーチ原稿を作成した。審査基準は、①言葉遣いや流暢性などの「日本語能力」、②オリジナル性、構成・展開、効果、表現力などの「論旨・論調」、「制限時間」などで評価される。スピーチ原稿の作成から本選出場まで期間、児童の意欲的な姿が見られた。また、スピーチコンテストの練習だけでなく、その他の教科学習に対しても前向きな発言が見られ、学習意欲に繋がった。スピーチコンテストは、小中高の部に分かれており、今後も外国にルーツをもつ児童の活躍の場の一つとして期待したい。

3 成果(感想)

スピーチコンテストに参加する中で、スピーチ原稿を繰り返し、修正しながら練習することで、自分のルーツの国について考える良い機会になった。また、スピーチの練習を行う中で、日本語の抑揚や話し方に注意して読み、日本語の学習にも繋がった。さらに、児童が楽しそうに練習に参加する姿が見られた。放課や家庭の時間を使って自発的に練習する姿も見られた。応募した児童の中には、本選へ出場できなかった児童や、参加意欲があっても、十分な日本語の表現力がないため、途中で断念する児童もいた。スピーチコンテストでは、一定の書く力や話す力が求められるため、日々の授業の中で、自発的に発言したり作文を書いたりする機会を積極的に設けて、基礎的な表現力を身につけられるようこれからも支援していきたい。本年度、本選に出場できなかった児童や途中で断念した児童についても、来年度のスピーチコンテストへの出場意欲に高め、活躍の場として繋げていきたい。





〈写真 スピーチ練習〉

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告 (9)			
学校名	中学校担当者	実践日時	令和3年7月28日・8月3日
実践名	高等学校訪問		
1 訪問先 ○ 修文女子高校学校(R4年度より修文学院高等学校) ○ 啓明学館高等学校 2 実践内容 私学助成金の拡充にともない、今後外国人の私立高校進学が増加すると見込んでいる。過去に外国人卒業生が進学した2校をピックアップし、南部中学校日本語担当者が修文女子高等学校へ、岩倉中学校日本語担当者が啓明学館高等学校へ訪問した。当日は事前に送った質問票にしたがって学校生活や学費などについての説明をいただいたほか、日本語教育が必要な生徒への対応について情報交換をした。また、施設見学や使用している教科書の閲覧をした。 3 成果(感想) ○ 修文女子高等学校 外国にルーツをもつ生徒の在籍人数は計10名で、外国人生徒に対する支援はないが、すべての生徒に対して「個別最適化」をモットーに支援している。職員室前に自習用の机が並び、生徒に個別に対応している環境があった。進路指導についても、「行ける進路」ではなく、「行きたい進路」へ導いているようで、手厚い個別支援をしている印象であった。 高等学校からは、受験前に少なくとも日常会話ができるようにして欲しいというリクエストがあり、今後ますます中高の連携や情報交換が必要になってくると感じた。 ○ 啓明学館高等学校 かなり丁寧に学校についての説明をしていただくことができた。実際に学校の中を回って設備などを見せていただいた。夏休み中でも、補習や部活動などに取り組む生徒の姿がたくさんあった。また、対応してくださった先生が、校内で活動中の生徒に声をかけてコミュニケーションを取っていたことも印象的で、学校の温かい雰囲気が伝わってきた。「学校でできることは全てやっていきたい」というお話の通り、細やかなケアを想像することができた。高校で活躍したいと考えている女子生徒や、ぜひ活躍してほしいと期待する女子生徒に、選択肢の一つとして紹介していきたい。			
啓明学館高等学校		修文女子高等学校	



様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(10)			
会場	岩倉東小学校	実践日時	令和3年10月～3月
実践名	国際理解イベント「ワールドウィーク」		
1 対象	外国人児童全員		
2 実践内容	放送委員会を中心に国際理解イベント「ワールドウィーク」を一週間ずつ隔週で開催した。週の初めに、コミュニケーションツール「Microsoft Teams」を活用し、国の文化やあいさつについて全校児童に向けて放送をした【写真1】。司会は放送委員が担当し、その国にルーツをもつ児童の代表者がアナウンスをするようにした。アナウンスをする内容は予め児童と一緒に調べ、原稿を作成した。話をする児童の姿を映すだけでなく、背景にスライド画面を共有させることで、見ている児童が音声と映像を通して理解できるようにした【写真2】。本校で在籍数が一番多いブラジルに焦点を当てた「ブラジルウィーク」では、「おはよう」は「BOM DIA」、「さようなら」は「TCHAU」を使ってあいさつをするように、毎日始業前や給食の時間の放送で全校児童に呼びかけた。毎日児童の目に触れられるように、教室の掲示用に国旗とあいさつのことばを印刷したプリントを担当に配付した。給食の時間の放送では、その国に興味をもてるような豆知識や、国旗の色と同じ色(ラッキーカラー)を体に身に付けると楽しめてよいことを放送委員がアナウンスしたり、国の伝統音楽を流したりした【写真3】。児童だけでなく教員も一緒に参加していることが伝わるように、ウィーク最終日は服装や髪飾り等ラッキーカラーを見つけてもらうよう呼びかけた。このような取組を「フィリピンウィーク」や「インドネシアウィーク」、「パキスタンウィーク」、「ネパールウィーク」といった他国についても同様に実施した。		
3 成果	外国にルーツをもつ児童の活躍の場を増やすことができた。母国の代表として全校児童にアナウンスした児童は、初めは緊張をしている様子だったが、練習の成果を発揮して堂々と話すことができたため、達成感を得ることができたようだった。また、インターネットを活用したり、家庭で両親に聞いたりして母国について調べる中で、新たな発見や母国について見つめ直すきっかけとなった児童もあり、この取組を通して他文化を学ぶだけでなく、母国の文化についても学ぶことができた。日本語教室で取り出し指導をしている他の児童からも、日本で生活する中で、母国について友達に知ってもらえることや知識を共有できることが嬉しいという声や、給食で宗教上の理由で豚肉や牛肉が食べられない友達のことを知ることができてよかったという声を聞くことができた。		



【写真1】



【写真2】



【写真3】

様式 1 各校における活動

令和 3 年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(11)			
会場	五条川小学校	実践日時	令和 3 年 10 月 25 日
実践名	日本語能力試験 N2 合格表彰		
1 参加者 6 年生児童 1 名 2 実践内容 テレビ集会で、教頭先生から日本語能力試験とは、N2 に満点で合格したことを全校生徒に伝える。 その後、校長室で、校長先生から賞状と励ましの言葉をかけてもらった。 3 成果(感想) 取り出し指導の時間の中で、読解練習を重点的に指導した。宿題も真面目に取り組む姿が見られた。 努力の結果、満点で合格することができた。必ず合格できると自分に言い聞かせて望んだ成果がでた ようだ。満点は次のステップの自信へとつながった。 (本人の感想) N2 は N3 に比べて一段と難しくなり読解練習では苦勞したが、満点が取れて嬉しかった。校長先生 から励ましの言葉もかけていただいて、もっと頑張ろうと思った。			
			

様式 1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(12)			
会場	五条川小学校	実践日時	令和3年12月6日 8:25～TV放送にて
実践名	国際理解集会		
1 参加者 6年生児童 5名、5年生児童 1名、4年生児童 1名、3年生児童 1名、2年生児童 1名 2 実践内容 テーマは「母国のあいさつの紹介と母国のSDGsの取り組みを伝えよう」 コロナ禍での実践なので、TV放送で行った。あいさつの紹介動画は事前に収録しておいた。当日は、高学年児童を中心に、SDGsの取り組みと現状をクイズ形式で紹介した。 3 成果(感想) 毎年行なわれる実践の中で、自分たちの役割を自ら明確にできるようになり、助け合うことが自然にできるようになっていた。日頃は、学校で日本語しか使わない児童たちも、母語でのあいさつは自信たっぷりであった。母国のSDGsの取り組みは、日本生まれで日本育ちである故に、知らない母国の現状を知ることができて良かったと思う。日本語教室の前に、各国のあいさつを掲示すると、あいさつが飛び交っていたのは異文化交流ができていたのだと思う。 (児童の感想) - 発表するときの間のあけかたが難しかったが、教室で、みんながおもしろかったと言ってくれて嬉しかった。 - あいさつの発音練習をお母さんとできて楽しかった。    			

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(13)			
会場	曾野小学校	実践日時	令和3年12月16日 ロング放課
実践名	日本語教室 お楽しみ会		
1 出席者 外国にルーツをもつ児童 2 実践内容 ・ 例年は学期に一度「お楽しみ給食会」を行っていたのだが、昨年度に続き今年度もコロナ対策のために給食会は取りやめ、お楽しみ会とした。 ・ 6年生が司会進行役を務め、クイズ、ゲーム、クリスマスツリー作りを行った。 ・ スライドにて「世界いろいろクイズ」と題して、児童がルーツをもつ国の世界遺産、観光地、小学校、料理などをクイズ形式で紹介した。その国にルーツをもつ児童がクイズに答えたり、自分の言語であいさつを披露したりするなど、子どもの活躍の場があった。 3 成果(感想) ・ 子どもたちから、「お楽しみがしたい。」との声を受けての開催となった。1年生にとっては、初めてのお楽しみ会が開催できてよかった。 ・ 子どもたちからは、「楽しかった。」「また、したい。」という感想があった。 ・ 今回も前回に続き、取り出し指導をしていない児童も1名参加してくれた。また、昨年度から取り出し指導を開始した児童で、昨年度は参加しなかった児童も今年初めて参加してくれた。こういった活動が、児童の自分のルーツに誇りと自信をもつきっかけになればと思っている。			
 〈ゲームの様子〉  〈集合写真〉  〈みんなで作ったクリスマスツリー〉			

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(14)			
会場	岩倉南小学校	実践日時	令和3年12月16日
実践名	漢字カルタ大会(2)		
1 出席者 2年生漢字学習をしている日本語教室の3,4年生児童(7名) 特別支援クラスの3年生児童(日本人)(1名) ・3年-6名、4年-2名、 2 実践内容 継続的に学習している漢字学習のまとめとして、今学期も大型の漢字カルタ大会を行った。2年生の漢字の約半分、80字をA4サイズのカルタにした。2チームに分かれて、約30分間で行った。今回は特別支援クラスに在籍している日本人児童も参加した。漢字をスライドで写すと未習の漢字であっても部首や漢字の形で懸命に探す姿があった。 3 成果(感想) 子どもたちは漢字カルタが大好きである。毎回5問の漢字学習と漢字テスト、学期末に漢字カルタ大会をすることがここ数年、日本語教室の学習スタイルとして定着し、漢字が好きだという児童が多くなった。今回は、同じチームになった異学年の児童がとても仲よくなり、教室ではなかなか友達をつくるができなかった児童のコミュニケーションの幅が広がったことがとても大きな成果だったと感じる。漢字カルタで勝敗はつくものの、最後に賞状を渡すととてもうれしそうに受け取っており、家庭訪問の際には家の冷蔵庫に貼り付けている児童もいた。今回は、1人の児童が誕生日だったこともあり、最後にみんなでハッピーバースデーの歌を歌ってお祝いできたこともよい思い出となった。子どもたちが生き生きと学習できる一つのスタイルとして、継続していきたい。			
   〈カルタを取って笑顔〉 〈カルタに向かってダッシュ〉 〈一人ずつもらった賞状〉			

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(15)			
会場	岩倉南小学校	実践日時	令和3年12月22日
実践名	日本語教室クリスマス会		

1 出席者

・ 日本語の取り出しをしている児童(計 19名)

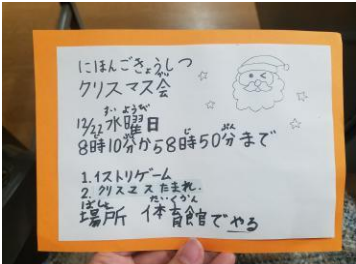
1年ー6名、2年ー3名、3年ー5名、4年ー2名、5年ー2名、6年ー1名

2 実践内容

2学期最後のお楽しみとして、クリスマス会を開催した。今回は、業前の8時10分から1時間目開始の8時50分までの40分間、体育館を使って行った。カルタ大会で仲良くなった4年生と3年生の児童が中心となって、プログラムの内容を考え、招待状を作り、15名それぞれの教室へ配って回った。赤チームと白チームの2チームに分かれて、イス取りゲームと玉入れを行い、各ゲームでポイント制を取り入れて行った。

3 成果(感想)

ゲーム中、高学年の児童が低学年の児童にさりげなくイスを譲ってあげたり、玉入れのやり方を教えてあげたりする様子を見て、異学年での交流の良さを実感した。また、日本語教室に通っていることの一体感が深まったように感じる。不登校気味だった児童にも、招待状を家まで持って行って声かけをしたところ、当日は通学班で登校して参加することができた。企画をした児童は、休み時間に日本語教室へ来て準備をするなど、とても積極的な様子が見られた。ゲームで何を準備するのか、どこでやったらいいのか、時間配分をどうするかなど、自分たちで考えてプログラムを練ることができた。みんなのために折り紙でクリスマスプレゼントを折ってくるなど、どうしたら楽しいクリスマス会になるのかを彼女なりに考えていたようだった。1時間目に少し遅刻してしまったが、児童が会を通してそれぞれ成長できるよい機会だった。



〈手作りの招待状〉



〈招待状を配る児童〉



〈イス取りゲームの様子〉



〈クリスマス玉入れの様子〉



〈全員で記念写真〉

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(16)			
会場	五条川小学校	実践日時	令和3年12月25日 9:00~11:30
実践名	冬休み宿題会		
1 参加者 1年生 1名、2年生 4名、4年生 2名、5年生 1名 2 実践内容 冬休みの宿題を日本語教室で行った。日誌やプリントなど各自が取り組んだ。休憩時間には、みんなでカルタ遊びをした。 3 成果(感想) 時間に遅刻する児童もなく、それぞれが着々と宿題をこなしていった。子どもたちの自主性や理解力がわかる良い時間となった。 (児童の感想) ・ みんなと宿題をすると楽しいし、時間が経つのが早かった。 ・ わからない問題は、すぐに質問できるし、その場で理解できるのが良い。 ・ 休憩時間にみんなでやったかるたが一番楽しかった。			
			

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(17)			
会場	岩倉南小学校	実践日時	令和4年2月1日・8日
実践名	国際理解集会～南小から世界旅行へ出かけよう～		
1 出席者 日本語の取り出しをしている児童 2月1日(火)トルコ・ブラジル・中国の児童(6名) 2月8日(火)フィリピン・パキスタン・チリ・中国の児童(13名) 2 実践内容 「南小から世界旅行へ出かけよう」と題して、全校児童を対象とした校内のクイズラリーを行った。日本語教室に在籍する6カ国の児童たちがそれぞれ自分たちの国の「食」について調べ、ポスターを作成し、クイズはそのポスターの中から出題した。放送は2回に分けて行い、1回目の2月1日は、代表児童がそれぞれの国のクイズや言語の紹介などをし、クイズラリーの告知をした。放送の日から1週間、全校児童がクイズラリーの用紙をもって学校中を探検し、答えを探しながら各国の食文化に触れた。翌週、2回目の放送を行い、クイズラリーの答え合わせを代表児童たちが行った。 3 成果(感想) この集会は、本校に在籍する外国人児童を通して、日本人児童が外国の文化や生活習慣を学ぶ機会をもつこと、そして、外国人児童にとっては、自分のルーツとなる国について発表をすることで、自国の文化に対する理解を深め、日本と母国の双方を敬う心を育てることであった。子どもたちは自分の国の「食」という身近なテーマでのポスター作りや発表を通し、日本語学習に対しても意欲を高めることができた。普段の授業で作文や音読をする時には気持ちの入らないことが多い中、写真を見ながら、一生懸命友達や先生に説明する様子が印象的であった。放送の日程が近づいてくると、休み時間を全て割いて練習をし、声をかけなくても自然とみんなが放送室に集まってくるようになった。国際理解集会の準備を通して仲良くなった子どもたちが休み時間にいっしょに遊ぶようになったり、放送後に先生やクラスメイトから声をかけてもらったりした。普段教室では目立った活躍することができない中で、全校児童に対して日本語教室の子どもたちの存在を知らせるよい機会となった。			
			
		〈放送の様子とポスター〉	
			
〈クイズラリーをする日本人児童〉		〈クイズラリー用紙〉	
		〈後半チームの発表〉	

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(18)			
会場	岩倉中学校	実践日時	令和4年2月2日
実践名	外国人向け入学説明会		

1 対象

岩倉中学校外国人保護者6名

2 実践内容

(1)学校説明

①中学校生活について

②上級学校進学について

(2)中学生からのビデオメッセージ

3 成果（感想）

来年度入学予定の外国にルーツをもつ児童の保護者を対象に、スライドを使って日本の中学校について説明を行った。また、中学1年生の生徒2名によるビデオメッセージを上映した。

今年度は、小学校担当者からの細やかな声かけもあり、昨年度より多くの保護者の方が中学校生活や上級学校進学に興味をもって参加してくださった。すでに日本の中学校を卒業した兄弟がいる児童の保護者の方も、熱心にメモを取りながら話を聞いてくださる姿があった。保護者の方からは、「中学校から勉強やテストが難しくなるので不安に感じている」「高校進学にかかる費用を知って驚いたが、助成金の制度があることがわかった」などの感想をいただき、日本の中学校や日本語教室、上級学校進学について知っていただくいい機会になったのではないかと考えている。

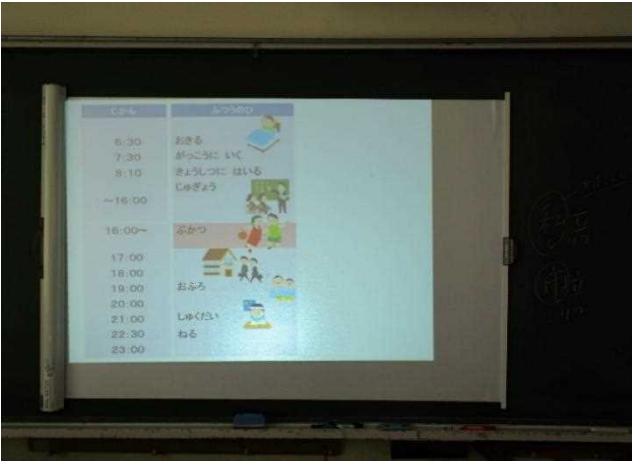
今回の外国人向け入学説明会で、来年度入学予定生徒の保護者と顔合わせができたことで、入学式当日の保護者の方の緊張と不安を少し取り除くことができたのではないかと感じた。しかし、昨年度に続き今年度も、コロナによる対応として保護者の方のみを対象とした説明会となったため、入学式前に児童と直接関わることはできなかった。一人一人の児童が中学校に問題なく適応していくことができるように、小学校担当者ともよく連携していきたい。

（記録写真）



様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(19)			
学校名	南部中学校	実践日時	令和4年2月3日
実践名	外国人のための入学説明会(児童向け)		
1 対象 東小学校 6年生児童9名 2 実践内容 ・ 小学校を卒業してからの進路 ・ 社会(仕事)について ・ ルール ・ 教科と先生について ・ テスト ・ 部活動の種類 ・ 5段階評価の通知表について ・ 日本語・英語・ポルトガル語で出されるお知らせについて ・ 高校に合格するまで ・ お金について 3 成果(感想) 保護者と一緒に南部中学校で開催する予定だったが、中止になったため、南部中学校日本語担当者が東小学校へ赴き、来年度中学校へ進学する児童を対象に、入学説明会を行った。 小学校を卒業してから中学校、社会人になるまでの課程を説明し、中学校での生活、勉強、部活動、テストについて説明した。児童たちは落ち着いてリラックスしたムードの中、興味深そうに耳を傾けていた。どんな部活動に入りたいのかという質問では、吹奏楽やバレーボールなど、それぞれの興味がある部活動について積極的に答えていた。中には女子がサッカー部に入りたいという発言があり、男子中心の部活動に女子が入れるのかと関心をもって話し合っていた。高校に行きたいですかという質問では、ほとんどの児童が挙手し、進学に夢を持っている様子がうかがえた。児童からは、中学校では年上の人を先輩と呼んだほうがいいのかという質問があり、外国ではそういう呼び方をしないが、できればそう呼んだ方がいいという答えに、一同うなずく姿が見られた。 保護者と一緒に参加できることが望ましいが、生徒だけで説明を聴くことにより、友だちと話し合う雰囲気が生まれ、質問しやすい印象を受けた。 会の終わりには、「説明を聞く前は、中学校生活に不安をもっていたが、友だちをつくってがんばりたい」という感想を口にしており、スムーズな入学につながる確信をもった。 3月14日に予定されている保護者向け説明会では、具体的な進学にかかる費用についてもふれ、お金の準備をしておいてもらうよう説明したい。 (記録写真)  			

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(20)			
会場	岩倉北小学校	実践日時	令和4年2月16日
実践名	外国人児童向け入学説明会		
1 対象 岩倉北小学校外国人児童2名 2 実践内容 (1) 日本の教育制度 (2) 中学校生活 ①ルール ②教科と先生 ③テスト ④部活 ⑤通知表 ⑥お知らせ ⑦大切なこと (3) 高校について (4) 中学生からのビデオメッセージ 3 成果(感想) 来年度、中学校に入学予定の外国にルーツをもつ児童を対象に、日本語教室で入学説明会を行った。通常であれば、児童も中学校での説明会に保護者とともに参加するのだが、今年はコロナ禍のため、保護者のみの参加となった。そのため、児童たちからスライドだけでも見たいとの要望があり、岩倉中学校からスライドをいただいて、説明会を実施した。 小学校との違い、テスト、部活、進路など、日頃児童たちから質問されていることがわかりやすくまとめられており、児童たちの新生活への不安を解消できたのではないかなと思う。二名とも進学希望なので、いい大学いい高校に行きたいのであれば、中学校から勉強をしっかりとしなければならないこと、出席率や学校生活での頑張りも重要視されることを話した。 義務教育の話がでたので、日本は中学校までが義務教育だが、中卒の人は少ないこと、よりよい仕事、自分が希望する仕事に就くためには高校は行った方がよいこと、高校にはレベルがあって、それによって進学できる大学も変わってくる可能性があるという話もした。児童たちは、真剣に聞いてくれ、中学校に行ったら頑張ると言ってくれた。細かい質問も出たので、中学校の日本語担当に確認して、後日また回答したいと思う。 (記録写真)  			

様式1 各校における活動

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(21)			
会場	岩倉北小学校	実践日時	令和4年2月21日
実践名	日本語能力試験 合格者表彰		

1 対象
岩倉北小学校外国人児童2名

2 実践内容
昨年の7月と12月に実施された日本語能力試験N4に合格した外国にルーツをもつ児童2名を、校長先生に校長室で個別に表彰していただいた。その後、学級で担任の先生からクラスメートにも二人の合格を伝えてもらった。

3 成果(感想)

日本語能力試験の合格を校長先生に表彰していただき、個別にお祝いの言葉をかけてもらったことで、最初は恥ずかしがっていたが、段々と誇らしい気持ちになったようだった。自分たちの頑張りが日本語教室以外でも認められ、うれしそうだった。また、校長先生から「試験は簡単だった？」と聞かれて「簡単だった！」と答えるなど、次の試験に向けても自信を持つことができたようだった。このモチベーションを維持し、日本語の勉強を継続していったほしい。

また、教室でもクラスメートに二人の合格をお祝いしてもらったが、日本語能力試験が日本人児童の間であまり認識されていないため、お祝いされる喜びと同時に、少し恥ずかしいという気持ちも感じたようだ。これからはもっと日本語能力試験を受験する児童を増やし、外国人児童にも日本人児童にも試験の認知度を高めていきたい。そして、お互いがよい刺激を与えあえるようになるといいと思う。

二人は来年度中学校に進学するが、中学校でも日本語能力試験を受験したいと言っていたので、頑張ってもらいたい。

(記録写真)






様式 1 各校における活動

令和 3 年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告 (22)			
会場	五条川小学校	実践日時	令和 4 年 3 月 3 日
実践名	日本語能力試験 N1 合格表彰		
1 参加者 6 年生児童 1 名 2 実践内容 高得点で日本語能力試験を合格したことで、校長先生から賞状と励ましの言葉をかけてもらった。在籍教室では、担任が N1 の難しさと本人の努力で合格したことを伝えてくれた。 3 成果(感想) 「卒業するまでに N1 まで合格できたらいいね。」これは、N5 を合格した 4 年のときから児童に言ってきた言葉だ。N1 合格、満点合格を目標に、取り出し指導の中では、読解や聴解問題を重点的に取り組んだ。本人の努力と、目標を高くもつ事で高い成果が出た。校長先生の励ましの言葉は次の目標へ背中を押してくれる魔法の言葉だ。本人の努力と校長先生の魔法の言葉で、中学生になっても頑張っていける自信がついたと思う。 (本人の感想) N1 は本当に難しかった。漢字も習っていない漢字が多く、読解問題は苦勞した。習っていない漢字は、勉強するときに調べたりしながら取り組んだ。読める漢字が増えていくのが嬉しかった。卒業するまでに合格したいという目標があったので頑張った。合格できて嬉しい。			
			

学習支援

学校名	五条川小学校	実践日／期間	令和3年4月～
支援	学校生活適応支援／学習支援		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒

五条川小学校1年 A(日本生まれ)ブラジル国籍

(2) 児童生徒の実態

入学した当初は、日本語の会話がほとんどできなかった。教室では、友だちを作ることが難しく、登校を渋ることも何回もあった。学習に対する姿勢は前向きであるが、人前で声を出すことは恥ずかしく、教室では声を出すことができずにいた。日本語教室では、大きな声で音読したり、発表したりすることができたため、積極的に楽しく学習していることは担任に伝えていた。2学期になり、仲の良い友だちができた。みるみる日本語が上達し、教室でも発表ができるようになってきた。2学期の後半からは、特定の友だちだけでなく、異学年の児童とも話したり遊んだりできるようになってきた。自分の意思や考えを伝えられるようになってきている。

(3) 目標

3月までに、カタカナと漢字80字の習得、読解力をつける、自分の意見や考えを大きな声で発表できるようになる。また、担任の指示の後、すぐに行動できるようになる。

2 支援の方策と経過

【学習面】

- ・ 1学期は、あいさつや身の回りにあるものの言葉から習得させていった。ひらがな練習を繰り返しながら、習ったひらがなの言葉をノートに書く練習も毎日繰り返し行った。
- ・ 言葉をたくさん集めて、言葉と絵を描いた『あいうえお言葉カード』を作った。
- ・ 範読は、挿絵を見ながら内容をかんたんに伝えてから行った。そうすることで、文字を読んでいるだけだった音読から、内容を理解しながら読めるようになってきた。また、物語文は、登場人物の気持ちも読み取れるようになってきている。
- ・ 既習した漢字は、毎回小テストを繰り返していった。
- ・ 1学期はテストも日本語教室で受けていたが、2学期からは教室で取り組めるようになった。

【生活面】

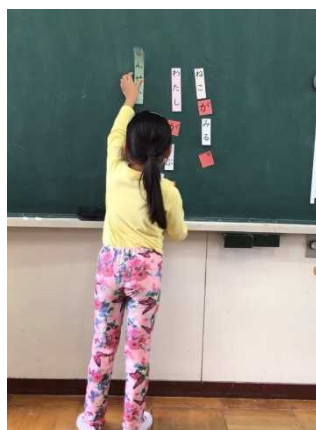
- ・ 1学期は、時々母子分離ができず、教室に入れなかったり、泣いて家に帰ったりすることもあり、母親を心配させていたが、夏休みに、日本語で宿題教室を実施したときに、異学年の児童と関わりをもち、コミュニケーションがとれるようになってきた。2学期からは、仲の良い友だちもでき、学校生活を楽しく過ごしている。

3 成果と課題

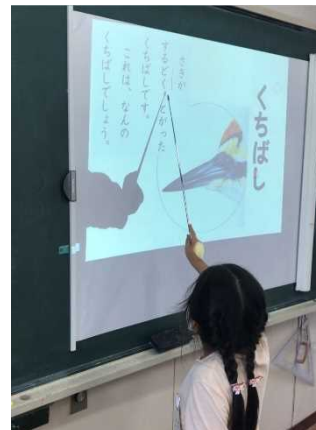
何事も前向きに取り組むことができる児童で、分からないときは質問もできるようになった。時間割を組むときに国語と算数を2時間連続で組んだことで、その時間の指導をやり残すこともなく児童を在籍教室に戻すことができた。2年になっても担任と連携して支援していきたい。



(あいうえお言葉カード)



(文も正しく作れるよ。)



(大きな声で音読できます)

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(2)			
学校名	岩倉東小学校	実践日／期間	令和3年4月～令和4年2月
支援	学習支援		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒

日本語教室取り出し指導児童 4年 3名

(2) 児童生徒の実態

・学校生活では母語で話すことは少ない。2才で来日。低学年で欠席日数が多かった。

(4年1名。ブラジル国籍)

・学校生活では母語で話すことがある。4才で来日。

(4年1名。ブラジル国籍)

・学校生活では母語で話すことがある。4才で来日。

(4年1名。ブラジル国籍)

(3) 目標

学年の文章の読みや書きと各自の学習のレベルにあった読み書きができるようになる。

2 支援の方策

主に3つの支援を行った。

1つ目の支援は、現学年の音読に取り組んだ。教科書のルビ付きの文章を使用し、毎時、音読を取り入れた。

2つ目の支援は、授業の振り返りの時間に、いくつかの振り返りで使う文型のパターンを提示し、それを参考に振り返りを行えるよう支援した。また、下記のように過去・現在・未来の時制に分けて振り返りの文例を提示して、児童が振り返りをしやすいように工夫した。

例) まえは、…だった。いまは、…です。つぎは、…したいです。

場面や児童に合わせて、過去・現在・未来のどれか1つに絞ることで、取り組みやすくするなどの工夫をした。

3つ目の支援は、市販の教材を活用して、児童の習熟度や意欲に沿った内容の学習ができるよう支援した。個人懇談の際に各児童の保護者に市販で販売されている教材の中で文章の読みを扱うものを用意してもらうように声かけを行い、日本語教室からの宿題として活用した。保護者には、本人が続けられるよう本人の漢字や語彙の習得レベルを伝えて、児童本人と話し合っ教材を用意してもらった。また、授業の一部を活用して、復習や在籍学級の学習と繋げて授業を展開した。

3 成果と課題

1つ目の支援では音読を繰り返し練習することで、在籍学級に戻った時に音読することに自信をもつことができた。2つ目の支援では取組みの当初は振り返りをする際に、何を書けば良いかわからない児童が多かったが、文型を繰り返し使うことで、自発的に書くことができるようになってきた。課題としては、文型に合わせて形容詞を正しく使うことができないことが多く、文法的な内容を含めた支援が必要になった。3つ目の支援については、児童が自分でできるレベルのものを選び、自発的に学習するすがたが見られた。保護者が児童の学習レベルを知る上でも、効果的であった。保護者の協力が必要なので保護者会などを通じて積極的に連携をとれるようにしたい。

① せいかつのこと

・きょうは、〇〇をよみました。

△△は□□みたいだった。

② まえといま

・まえは、〇〇だとおもっていました。

いまは、…だとおもいます。

③ つぎのこと

・きょうは、〇〇だった。

こんどは、…したい。



(ふりかえりの見本)



(音読の様子)

令和３年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(3)			
学校名	岩倉中学校	実践日／期間	令和３年４月～令和４年２月
支援	進学を前提とした進路指導		
1 実践の概要 (1) 対象児童生徒 岩倉中学校３年生(通常学級に在籍)の５人 (2) 児童生徒の実態 ５人とも、家庭の経済力もあまりなく、学力も低い。また、５人のうち４名は小４以前での来日のため、外国人選抜入試などに当てはまらない。 (3) 目標 本人の能力や希望に合わせた進路の実現をする。将来への展望を持たせたうえでの高校進学への動機付けをする。また、希望していた学校へ進学できたという経験を通して、成功体験を積ませたい。 2 支援の方策と経過 １年生のときから、折に触れて進路指導をしていた。５人ともなんとなく「高校は行きたい」だったので、学校生活を意欲的に送ることができるよう支援していた。 ３年生の４月ごろから、「どのような将来にしたいか」、「どんな大人になりたいか」というところから、中学卒業後はどのような進路が良いか、一人一人と話した。本人の進路希望と保護者の希望が食い違うような状況もあったが、家庭訪問や保護者会で本人と保護者の間に日本語担当が立つこと、両者の希望をすりあわせることができた。 ２学期の評定を上げることと、入試に必要な基礎力を養うことを目標に夏休み中に全１２回の勉強会を開いた。日本語担当がそれぞれの生徒に必要な学習内容で学習予定を組んだことで、３日に１回ほどの開催だったが、効率的に学習させることができた。 高校入学はゴールではなく、スタートであるという意識をつけさせるために、高校での生活や授業の履修について、折に触れて話した。また、高校の勉強についていくためには、何よりも小中学校での基礎が大事だと説明し、反復練習に取り組ませた。特に、日々の学習の際に、高校での学習内容を簡単に説明するなど、学習内容は全てつながっていることを強調しながら、授業をした。 3 成果と課題 中学校の入学説明会のときから、高校進学にかかる費用の説明を保護者にしていた。しかし、補助金として返金されるとはいえ、５０万円から６０万円の進学費用を用意できない家庭も多かった。 入学後も進路説明会の中で、費用について説明していたが、家庭の経済状況として５０万円から６０万円の進学費用を捻出することは難しいのかもしれない。 受験自体はこれからだが、５人とも本人・保護者の希望が一致した状態での受験校の決定となった。生徒たちが受験に向けての直前の準備を全力で取り組めるよう、見守っていきたい。また、中学校生活の残された時間で、社会で生きていくために必要なことを教えていきたい。			

学校名	曾野小学校	実践日／期間	令和3年4月～令和4年3月
支援	学習支援		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒

曾野小学校 1年生3名、2年生2名、3年生4名、5年生3名

(2) 児童生徒の実態

本校に在籍する日本語教育が必要な外国にルーツをもつ児童の多くは幼少時からの滞在や日本生まれではあるが、家庭における言語環境が日本語ではない児童が大半である。そのため、語彙数、とりわけ漢字語彙、教科語彙の数が少ない。また、漢字学習に難しさを感じている児童も多く、それが漢字学習への抵抗感を高めている。漢字学習への抵抗感をなくし、漢字への興味・関心を育てることで、漢字語彙を増やし、語彙力や表現力を高められるのではないかと考え、本実践に取り組んだ。

(3) 目標

児童の漢字学習の段階に応じて、以下の①～④を目標とした。

- ① 漢字を正しく読む。
- ② 漢字の意味を理解し、漢字を正しく使って文を作る。
- ③ 漢字を組み合わせる熟語を作り、正しく読む。
- ④ 熟語の意味を理解し、文の中で正しく使う。

2 支援の方策と経過

漢字語彙を増やす手立てとして、1枚に漢字1字が書かれたカード(以下、漢字カード)を作成し、それを使った5分程度の活動を授業の中で継続して行った。児童の漢字の定着状況に応じて、「漢字を読む」、「熟語を作る」、「漢字・熟語を使った短文を書く」の3つの活動を行った。

(1) 漢字を読む(漢字学習の初歩段階の児童対象)

漢字カードを1枚ずつ提示し、漢字の読みを確認し、練習する。並べられた漢字カードの中から児童が1字ずつ漢字を読み、そのカードを取る。

(2) 熟語を作る(漢字の読み書きがある程度身に付いてきた段階の児童対象)

並べられた漢字カードの中から、漢字カードを組み合わせる熟語を作り、それを読む。

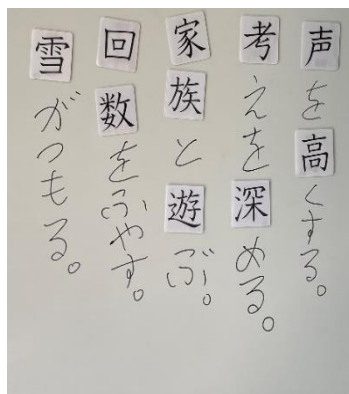
(3) 漢字・熟語を使った短文を書く(漢字の読みがある程度身に付き、熟語を作ったり、読んだりできるようになった児童対象)

並べられた漢字カードの中から、漢字・熟語を使って、短文を書く。

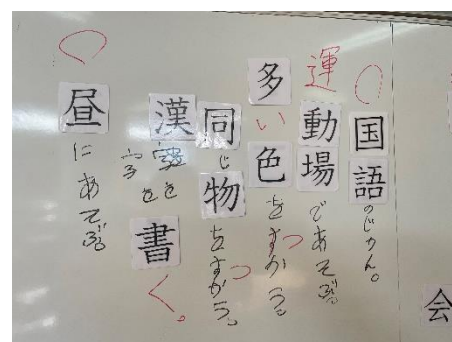
(4) 短文を書き終わったら、一人ずつ、自分が書いた文を読む。漢字、送り仮名の間違いがあれば、この場で指摘をした。また、助詞等の間違いについても確認した。



〈写真1 短文を書く児童〉



〈写真2 児童が書いた短文〉



〈写真3 児童が書いた短文 訂正後〉

3 成果と課題

学年に関わらず、全ての児童が集中し、積極的に漢字カードを使った活動に取り組む姿が見られた。漢字を苦手としている児童もゲーム感覚で取り組めるため、「漢字カードをしたい。」という声もよく挙がった。漢字への抵抗感をなくし、興味・関心を引き出すという点においては、一定の成果があった。生活や学習活動の中で目にした語彙を漢字カードで再現し、繰り返し使ってみることが、語彙を獲得することにつながると考える。今回の実践では、漢字の読みの習得と運用能力を身に付けることに焦点を当て、漢字カードを使った活動に限定したため、書く指導はできていない。今後、書く指導へどのようにつなげていくかが課題である。

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(5)			
学校名	岩倉中学校	実践日／期間	令和3年4月～令和4年3月
支援	学習支援		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒
岩倉中学校1年 生徒A
パキスタン国籍。小学校3年生で来日。

(2) 児童生徒の実態
日本語に苦手意識はあるが、明るく、友達と仲良く関わることができる。家庭での学習習慣が定着せず、課題の提出が遅れている。特に漢字の読み・書きが苦手で、国語の教材はルビ付きを渡している。

(3) 目標
文章を書くことに慣れ、在籍学級での振り返りなど、自分の考えを日本語で表現できる。日本語教室での1時間の学習内容を、振り返りプリントに分かりやすく書くことができる。

2 支援の方策と経過

(1) 選択式の振り返り
振り返りプリントに1時間の学習の振り返りを記述するだけでなく、「◎・○・△」の3段階で自分の学びを自己評価することにした。日本語の能力が低い、語彙が少ないなどの理由から、外国にルーツのある生徒にとって、自分の気持ちや考えを文章に書き表すという学習活動は非常にレベルが高く、また、苦手意識をもっている生徒が多い。3つから1つを選択して○をつけることで、自分の学習の理解度を自己評価することができるのではないかと考えた。

(2) 振り返りに使用する言葉の提示
全てを自分の力で書くことが難しいので、1時間の学習で出てきた「重要語句」や「新出漢字」を中心に、振り返りに使用する言葉を提示した。使用する言葉をいくつか提示することで、生徒が言葉を選び、文章を書く手助けになるのではないかと考え、実践を行った。

3 成果と課題

選択式の自己評価を取り入れ、自分の学びを振り返り、3つから選んで○をつけることで、生徒は自分の理解度を表現することができ、教師は生徒の自己評価を大まかに把握することができた。そして、その後の振り返りを記述する際に、どのような声かけをするとよいか、支援の方法を考えるヒントになった。

また、振り返りに使用する言葉の提示をすることで、「分かった。」「難しかった。」という内容で終わっていた文章が、「○○とは、△△だということが分かった。」など、自分の知っている語彙を使用して考えをまとめようという姿勢が見られた。

振り返りを毎時間行う中で、生徒が自分の考えを文章に書き表す力、正しく自己評価する力の向上を目指し、今後も実践を行っていきたい。

日本国教室 振り返りプリント		年 組	番 ()
月/日(曜日)	教科	学習内容	振り返り・重要語句
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	

〈振り返りプリント〉

日本語教室 振り返りプリント		年 組	番 ()
月/日(曜日)	教科	学習内容	振り返り・重要語句
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	
		△・○・◎	

〈振り返りプリント〉

学校名	岩倉東小学校	実践日／期間	令和3年7月～令和4年2月
支援	学習支援		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒

岩倉東小学校3年生5名 ブラジル国籍2名 フィリピン国籍1名 (日本生まれ)
インドネシア国籍1名 ベトナム国籍1名 (5才来日)
4年生4名 日本国籍1名 ブラジル国籍1名 (日本生まれ)
インドネシア国籍1名 パキスタン国籍1名 (3年生来日)

(2) 児童生徒の実態

3年生の児童は、日本語力の中・上級レベルで、日常会話に支障はない。意欲的に学習に取り組むことができ、在籍学級の授業に参加できているが、書くことに苦手意識がある。

4年生の児童は、日本語力は初・中級レベルで、基本的な日常会話はできる。しかし、日本語の語彙が少ないために、現学年の国語の文章の読み取りは難しい。

日常生活の中で、日本の文化や伝統に触れる機会は少ない。日本生まれでも、ことばは聞いたことがあっても意味は分からないことが多い。児童たちが日本の文化や伝統を知る場面が少ないと感じている。

(3) 目標

日本の四季を五感で感じ、日本の文化や伝統に親しむことができる。実物に触れることで、ことばの意味を正しく理解し定着させる。授業の導入部で実物を用いることで次の活動へつなげ、課題に取りかかりやすくする。

2 支援の方策と経過

3年生国語「夏のくらし」では、「すだれ」「ふうりん」「かとり線香」などの実物を用意し、児童が日本の夏を五感で感じながら学ぶことができるよう支援した。〈図1〉「食べ物のひみつを教えます」では、導入として、「いも」がいろいろな食品にすがたをかえて食べられていることをクイズ形式にして実物を見せ、文章を書くことへの苦手意識が薄れるよう工夫した。〈図2〉

4年生国語「ごんぎつね」では、「すすき」「くり」の実物を用意し、児童が物語の情景を想像できるよう促した。〈図3〉「世界にはこる和紙」では、「和紙」を用意し、文章から読み取った和紙にはやぶれにくいとくちょうがあることを実際に体験できるようにした。「冬の楽しみ」では、「ゆず」を用意し、「冬至」の意味と「ゆず湯」の習慣も知ることができるよう掲示を作成した。〈図4〉

3 成果と課題

児童からは、「ふうりんの音がきれいだった。」「すすきはふわふわしていた。」「ゆずはみかんみたいなにおいがした。」という感想が聞けた。実物に触れたからこそ分かったことだと、成果を感じた。また、「くりのまわりは痛いのに、ごんはどうやってくりを持ってきたのだろうか。」というふりかえりもあり、実物を通して登場人物の気持ちや場面の情景を想像することができた。今後も実物を用いた学習支援をしていきたい。

(記録写真)



〈図1〉



〈図2〉



〈図3〉



〈図4〉

学校名	岩倉北小学校	実践日／期間	令和3年9月～令和4年1月
支援	学習支援		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒

岩倉北小学校1年生～4年生 複数名

(2) 児童生徒の実態

低学年児童の数名が、学級での振り返りや感想文、説明文を書けない、もしくは書くのに時間がかかる、書いた文章の意味がよくわからない状態であるという話を担任の先生から聞いていた。それを受け、日本語の取り出し時間内に国語の単元の中で文を書かせることを試みたが、何を書いていいのかわからない、書き方がわからない、字や文を書くのがめんどくさいなどの理由から、なかなか思うように文を書く練習ができないでいた。

(3) 目標

まず、文を書くことへの苦手意識をなくし、自分から積極的に文を書くことに取り組むようにする。次に、書きたい内容を読み手にわかりやすく書くことを心がける。

2 支援の方策と経過

夏休みなど長い休み明けや遠足などのイベントの後に、楽しい雰囲気のまま児童と世間話をし、いつだれと何をしたか、どこへ行ったか、どうだったかなどの詳細と感想をさりげなく聞き出すようにした。一通りの話を聞いてから、今の話をそのまま文に書いてみようと話し、話し言葉のまま書かせた。

本人と一緒に書いた文を読みながら、以下の点を確認していった。

- ・ 誤字脱字
- ・ 「です／ます」または「～だ」など、文末表現の統一
- ・ 同じ表現の繰り返しはないか。
- ・ いつ(when)、どこで(where)、だれが(who)、何を(what)、どのように(how)したのかが書かれているか。

「書きなさい」と丸投げするのではなく、書く内容と直す点を具体的に示して、児童が前向きに作文に取り組めるようにした。

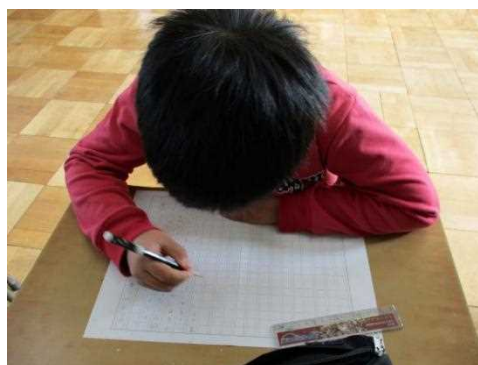
3 成果と課題

書いた作文の長さや内容に差はあったものの、書くのを渋る児童はいなかった。それぞれが文を書くことを楽しみ、積極的に取り組んでいたと思う。また、前に書いた作文を日本語教室に掲示しておくことで、作文に継続して取り組んでいるという実感を持つことができ、次に書いた作文とも比較をして自分の成長も感じることもできたようである。

しかし、上記のような指導方法は、作文を書く練習をさせることはできるが、自分で何を書くかから考え、まとめ上げる力をつけさせることはできない。在籍学級では一人で作文を書かなければならないことを考えると、これからは書く練習とともに、自分で何を書くか考える思考力をつけるトレーニングも必要であると感じた。また、5年生以降は話し言葉ではなく、書き言葉を使った文を書けるようにすることも課題である。



〈写真1 日本語教室の作文掲示〉



〈写真2 作文に取り組む児童〉

学校名	岩倉中学校	実践日／期間	令和3年9月～令和4年2月
支援	学習支援		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒

岩倉中学校2年生2名 A(日本生まれ)ブラジル国籍 母語：ポルトガル語
B(日本生まれ)日本国籍 母語：フィリピン語

(2) 児童生徒の実態

2名の対象生徒はともに日本生まれである。この2名の生徒に限らず、最近は日本生まれの外国にルーツのある児童生徒が増えていることを感じる。しかし、それらの児童生徒と接してみると、家庭環境や本人の能力により、語彙が少なく、何かの事象を説明する力が不足していることを感じる。また、今回の対象生徒2名はともに特別支援学級在籍であるが、外国にルーツを持ちつつ、生活面、学習面で何らかの課題を抱えているというケースも対象生徒に限らず少なくないように感じる。生活の中で習慣的に知っている知識や語彙は身に付いているが、ある状況を詳しく説明するとなると言葉が足りなくなるということも多々あり、物事が複雑になればなるほど理解が難しい。日本生まれでありながら、生活面や学習面で課題を抱えている生徒たちへの支援を模索したい。

(3) 目標

生活場面で出会う様々な事象に対し、正しくその場の状況説明ができることを目標とした。彼らが進学、就職と人生を歩んでいく時、必ず困った事象に出会うと考え、その際にその状況を正しく周りの人に説明したり、相談したりする力を養う必要があると感じたためである。

2 支援の方策と経過

対象生徒らが発達検査を受けた際、臨床心理士の方から、「学習や仕事に取り組む際はやり方が決まっているものをルーティーンとして取り組む方がいい。また、体験して覚えていく方がいい。」という話があったため、なるべくそれに沿う学習方法を取り入れることはできないかと考えた。そこで、2学期から3学期の間、授業中のモジュールの1つとして、「どんな場面か説明しよう」という課題を継続して取り入れることとした。

【どんな場面か説明しよう】

①ソーシャルスキルトレーニングカードを用い、生徒らが体験したことがあると思われる少し困った場面のイラストを提示する。(図1)

②5W1H(When(いつ)、Where(どこで) Who(だれが)、What(何を)、Why(なぜ) How(どのように))の決められた型に沿って、説明メモを作成する。(写真1)

③説明メモを基に、正しい日本語で状況を説明する文を考え、発表する。



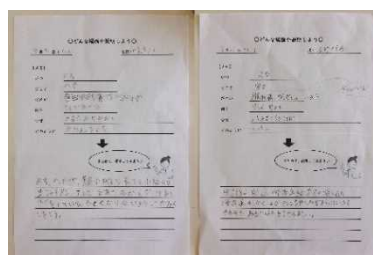
〈図1 ソーシャルスキルトレーニングカード〉



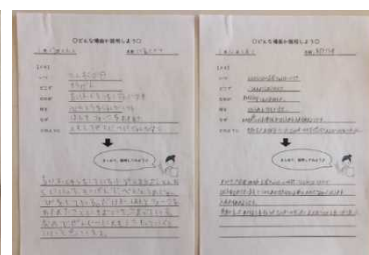
〈写真1 説明メモ作成の様子〉

3 成果と課題

9月と1月に作成したワークシート(写真2・3)を比較すると、少しずつ状況を正しく捉えられるようになり、それを適切な日本語で詳しく表現できるようになってきていることを感じる。しかし、今回は生徒の発達段階に合わせ、これまでに経験したことがあると思われる場面設定をした。そのため、この課題を通して新しい語彙に出会わせることができたとは言えない。今後は、語彙も増やしていけるようこの課題に毎回指定の言葉を設定し、それを使って説明メモや状況を説明する文を作成させたい。



〈写真2 9月作成ワークシート〉



〈写真3 1月作成ワークシート〉

学校名	岩倉東小学校	実践日／期間	令和3年11月5日
支援	授業公開 実践報告 小5 日本語「語彙」、国語「古典の世界」、算数「面積」		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒

岩倉東小学校5年生4名 A(日本生まれ)ブラジル国籍、B(日本生まれ)ブラジル国籍
C(5才来日)フィリピン国籍、D(7才来日)インドネシア国籍

(2) 児童生徒の実態

友達と話す簡単な日常会話に支障はないが、語彙力が学年相当に達していないことや、日本語の表現力が低いことから、教科学習においてつまずきが見られる。また、自分の考えを順序立てて説明することが苦手で、上手く伝えられないもどかしさを感じている様子である。学習には前向きな気持ちで取り組むことができるため、個々の課題に応じた日本語指導を継続していく必要がある。

(3) 目標

モジュール1 本時で使うものの名前を知り、その使い方が理解できる。(日本語)

モジュール2 落語の仕草や話し方を体験し、落語の特色を知る。(国語)

モジュール3 ひし形の面積の求め方を考えることができる。(算数)

2 支援の方策と経過

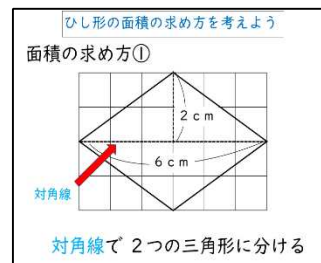
モジュール1では、扇子や手ぬぐいの使い方を実物で見せたり、スライド教材を使ったりして視覚的に分かりやすく説明をした。その際、「仰ぐ」や「拭う」、「包む」ということばも併せて指導することで、新しく獲得する語彙数を増やすことができた【図1】。モジュール2では、落語家がそばを食べる仕草や手紙を書く仕草をする時に、扇子や手ぬぐいがどのようなものに見立てられたかについて「見立てる」ということばを使って表現させた。「扇子が箸に見立てられた」「手ぬぐいが紙に見立てられた」といった短文が児童の口から出てきた【図2】。モジュール3では、ひし形の面積の求め方を操作活動を取り入れて児童に考えさせた。自分の考えを「まず」「次に」「それから」「最後に」等の接続詞を意識させながら説明をさせた【図3】。



【図1 語彙】



【図2 古典の世界】



【図3 面積】

3 成果と課題

日々の学習を通して、語彙力や表現力に重点を置いて指導することができた。新しい単元を学習する度に新しいことばを習得していかなければいけないが、児童が授業中に使うことばや振り返りの内容から、少しずつ日本語力の向上が見られた。また、日本語教室で先行学習を行うことで、学級に戻った時に自分の考えを積極的に発言できるようになってきたことを児童から聞くことができた。

課題が2つ挙げられる。1つ目は、書く活動が足りないことである。モジュール指導の中で、話す活動に偏りがあり、書く活動を十分に確保することができなかったため、双方の活動をバランスよく取り入れていく必要がある。また、スライド教材は視覚的な効果は高いが、画面が切り替わると学習内容を板書のように残すことができないというデメリットがある。そのため、板書として残す内容とスライド教材として提示する内容との使い分けが必要である。

2つ目は、在籍学級と日本語教室の連携である。日本語指導を積み重ね実践することで、どれくらい日本語力が定着したのか、学級で同じ単元の授業を受けた時に日本語教室で学習した知識をどれくらい活かすことができているかを確認したり、担任と情報交換をしたりする時間を確保していくことが大切である。外国にルーツをもつ児童が学級の授業で活躍できるように、個々に応じた指導を今後も継続することが大切だと考える。

- 1 日本語指導 教科補充指導、日本語中級指導 ステップ3 (ステップ0～4)
- 2 学習計画 日本語 語彙、漢字【ス】
国語 『鳥獣戯画』を読む (在籍：6時間完了 日本語：3/6モジュール) 【現】
算数 比例と反比例 (在籍：17時間完了 日本語：1/8モジュール) 【現】
- 3 対象児童・日本語力 6年生5名 週3回取り出し指導
A (6才来日) ステップ3、B (1才来日) ステップ3、
C (日本生まれ) ステップ3、D (日本生まれ) ステップ3、
E (日本生まれ) ステップ3
- 4 本時の指導 3モジュール
- (1) 目 標
- ア モジュール1 比例する2つの量の変化を調べ、比例の意味と性質について理解することができる。 (算 数)
- イ モジュール2 漢字の読み方やことばの意味を理解することができる。 (日本語)
- ウ モジュール3 文章と絵を照らし合わせながら本文を読み、筆者の見方を捉えることができる。 (国 語)

(2) 学習過程

モジュール	児 童 の 活 動	教 師 の 支 援
算 数 比例と反比例 15分	1 ともなってしまう2つの数量関係について調べ、比例の意味や性質を説明する。 (1) 水の深さと時間の変わり方について調べる。 ・ 時間が2倍、3倍になると、水の深さも2倍、3倍になる。 (2) 比例の意味や性質を知り、ともなってしまう2つの量について説明する。 ・ x の値が2倍、3倍・・・になると、 y の値も2倍、3倍・・・になるとき、 y は x に比例する。	○ アニメーション効果 (絵) を使い、ともなってしまう2つの数量の関係を捉えられるようにする。 ○ 表を順に提示し、2つの数量の変わり方に着目できるようにする。 ○ 比例の定義を x と y を使って表現することを押さえる。 ○ 本時で扱う、 x の値、 y の値などの教科用語を使いながら説明するよう促す。
日本語 語彙 8分	2 本時で使う漢字の読み方の確認やことばの意味を知る。 (1) 漢字の読み方を確認する。 (2) ことばの意味を知り、使い方などを練習する。	○ 漢字の読み方の確認とともに、ことばの活用の仕方を考える場面を設定し、語彙の定着を図れるようにする。 ○ ことばの意味が理解できているか確認し、必要に応じて簡単に解説をする。
国 語 『鳥獣戯画』を読む 17分	3 第5、6段落の文章と絵を照らし合わせながら、筆者の絵に対する見方を考える。 (1) 絵から読み取った自分の見方を伝え合う。 ・ 兎が投げ飛ばされている。 ・ 蛙たちは笑っている。 (2) 本文を読み、筆者の絵に対する見方を考える。 ・ 蛙の口もとについて書かれている。 ・ 筆者は、激しい気合いがこもっていることがわかるね。と言っている。 (3) 筆者の絵に対する見方についてまとめる。 ・ ほんのちょっとした筆さばきだけで見事にそれを表現している。	○ 一枚目の絵や文章、筆者の見方をまとめたものなどを提示し、前時までの学習内容を想起できるようにする。 ○ 文章の内容が理解できているか確認しながら、短いまとまりの文章を提示する。 ○ 必要に応じて動作化させ、ことばの理解度を確認する。 ○ 文と対応する絵の部分を線で結ぶよう伝える。 ○ 自分が絵から読み取った見方と筆者の絵に対する見方を比較しながら考えるよう助言する。 ○ 文を内容ごとに色分けし、筆者の見方や考え方、評価が文のどこに表れているか捉えられるようにする。
ふりかえり 5分	4 本時のふりかえりをする。 ・ 主としてモジュール3の国語「『鳥獣戯画』を読む」のふりかえりをする。	○ 板書やプリントなどを見ながら、本時のふりかえりをするよう伝える。 ○ つまづいている児童には、書き出しを指定したり、ポイントを明示したりする。

- 5 評 価
- ア モジュール1 比例の意味と性質について理解し、 x の値や y の値などの教科用語を使い、ともなってしまう2つの数量関係について説明することができたか。 (算 数)
- イ モジュール2 本時で使う漢字を正しく読み、ことばの意味を理解することができたか。 (日本語)
- ウ モジュール3 自分が絵から読み取った見方と筆者の絵に対する見方を比べながら、本文を読むことができたか。 (国 語)

令和3年度 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 実践報告(10)			
学校名	岩倉東小学校	実践日／期間	令和3年11月5日
支援	授業公開 実践報告 小6 算数「比例と反比例」、日本語「語彙」、国語「鳥獣戯画を読む」		

1 実践の概要

(1) 指導内容

算数—「比例と反比例」、日本語—語彙、国語—「鳥獣戯画を読む」

(2) 対象児童生徒

岩倉東小学校6年生5名 A(6才来日)ブラジル国籍、B(1才来日)ブラジル国籍、
C(日本生まれ)ブラジル国籍、D(日本生まれ)ブラジル国籍、
E(日本生まれ)フィリピン国籍

(3) 児童生徒の実態

日本語力は中級レベル。日常会話に支障がなく、在籍学級の授業に参加できている。日本語教室では主に現学年の内容を学習しており、意欲をもって取り組むことができている。しかし、算数の「比例や反比例」の学習では、表から関係性を考えたり、値を求めたりすることはできるが、その単元でしか扱わない教科用語に関しては、なかなか定着しないため、ことばで表現することができない。また、国語の「鳥獣戯画を読む」など、説明文で使われていることばの意味や文章構成、本文の内容理解に時間がとてもかかる。本時では、視覚的教材を効果的に使いながら、学習内容の理解を促すとともに、児童がアウトプットする場面を設定し、学習内容や教科用語の定着を図っていきたいと考え、以下の授業実践を行った。

(4) 目標

ア モジュール1

比例する2つの量の変化を調べ、比例の意味と性質について理解することができる。(算数)

イ モジュール2

漢字の読み方やことばの意味を理解することができる。(日本語)

ウ モジュール3

文章と絵を照らし合わせながら本文を読み、筆者の見方を捉えることができる。(国語)

2 支援の方策と経過

モジュール1では、アニメーション効果を使い、ともなって変わる2つの数量関係を捉えられるよう、表を順に提示した。また、本時で扱う「比例と反比例」に関する教科用語を押さえ、比例の意味や性質、ともなって変わる2つの量について説明できるよう促した。モジュール2では、漢字の読み方の確認とともに、ことばの活用の仕方を考える場面を設定し、語彙の定着を図れるようにした。児童がつまずきやすい言葉を抽出して、写真やイラストなどの画像を提示し、ことばの意味の理解を促した。また、ことばの意味が理解できているか適宜確認し、必要に応じて簡単に解説を行った。モジュール3では、リライトなしの教科書の本文を使った。そのため、短いまとまりの文章を提示し、内容が理解できているか確認しながら読み進めた。また、自作のワークシートを使い、本文と対応している鳥獣戯画の絵の部分を線で結ばせ、筆者の見方を捉えられるよう促した。自分たちでこれまでに絵から読み取ったことをふりかえられるようにすることで、筆者が絵に対する見方を比較させたり、筆者の絵に対する見方や表現を考えたりできるよう促した。

3 成果と課題

授業全体を通して、アニメーションやイラスト等を使った視覚で捉えることができる教材は、日本語指導が必要な児童にはとても有効な手立てである。しかし、単にことばを覚える、意味を知るといった活動でとどまっては、語彙や表現力の広がりがない。そのため、1つのことばや文を使って、様々な表現ができるような力を育てていくことが必要だと感じた。そのため、インプットしたことをアウトプットする場面を適宜設けることで、児童の語彙の定着を図り、表現力を育むとともに、つまずき等の課題を把握することができた。「比例と反比例」では、比例の性質を説明するために必要な教科用語を押さえ、繰り返し説明させることで、学習用語の定着を図ることができた。「鳥獣戯画を読む」では、毎時間ワークシートに自分の考えや学習のふりかえりを書き続けることで、児童自身が学びの深まりや成長を感じることができた。今後もアウトプットに重点を置いた指導を行い、学級で活躍できる日本語・教科学習力を育てていきたい。



【授業の様子】



【授業の様子】

- 1 日本語指導 教科補充指導, 日本語初級指導
- 2 学習計画 日本語 数と漢字、国語 くじらぐも【現】、日本語 もいの名前(乗り物)、算数 たし算(2)【現】
- 3 日本語力 ステップ2 (ステップ0～4)
- 4 対象児童 A 1年生(日本生まれ)
- 5 本時の指導 4モジュール

(1) 目 標

- ア モジュール1 数の数え方や漢字での表記を知り、正しく読んだり、数えたりする。 (日 本 語)
- イ モジュール2 物語の第二場面の音読をし、会話文の読み方を工夫する。 (国 語)
- ウ モジュール3 乗り物の名前と仕事を知り、名前と仕事を正しく結びつける。 (日 本 語)
- エ モジュール4 繰り上がりの足し算を正しく計算し、ゲームをする。 (算 数)

(2) 学習過程

モジュール	児 童 の 活 動	教 師 の 支 援
日本語 語彙 8分	1 漢字で書かれた数の数え方を覚える。 (1) 数の数え方をスライドを見ながら、 繰り返し練習する。 (2) 漢字の一から十のカードを正しい順 番に並べたり、取ったりする。	○ 漢字にふりがなをつけたスライドを 用意する。 ○ 間違えても、ヒントを出して、楽し んで漢字に親しめるようにする。
国 語 くじらぐも 【現】 15分	2 物語を読んで、内容を理解する。 (1) 物語の第二場面を3回、音読練習する。 (2) かぎ(「」)の読み方について考え、 工夫して読む。	○ 徐々に長い文を読めるように、範読 する長さを調整する。 ○ 誰の言葉かを想像するために、イラ ストカードを準備する。 ○ 身振りや手振りを付けたり、顔の向 きなどを工夫するように声かけする。
日本語 ものの 名前 12分	3 乗り物の名前を知り、それぞれの仕事 を考える。 (1) ひらがなの拗音やカタカナで書かれ た乗り物の名前を正しく読む。 (2) 乗り物の仕事を考え、名前と組み合 わせる。 (3) カルタ遊びをする。	○ 乗り物の名前が覚えられるように複 数回繰り返す。 ○ 乗り物の仕事を説明するヒントとし て、写真を提示する。 ○ 乗り物の仕事を書いた読み札を用意 する。
算 数 たし算(2) 【現】 10分	4 足し算カードを使って、大きさをくらべ をする。 (1) 足し算の計算の仕方を復習する。 (2) 足し算カードを使ったゲームをする。	○ 数図ブロックのヒントを書いた、た し算カードを準備する。 ○ お互いが持っているカードの大き さが同数になるように、カードを分けて おく。

(3) 評 価

- ア モジュール1 漢字で書かれた数の数え方をリズムよく読んだり、数えたりできたか。 (日 本 語)
- イ モジュール2 物語の登場人物になりきって読み方を工夫できたか。 (国 語)
- ウ モジュール3 乗り物に興味をもち、名前と仕事を正しく結びつけられたか。 (日 本 語)
- エ モジュール4 繰り上がりの足し算の仕方を理解し、楽しくゲームができたか。 (算 数)

(4) 板書計画

ア 日本語 語彙 かずをかぞえよう！  もの の かぞえかた	イ 国語 くじらぐも 	ウ 日本語 乗り物の名前 	エ 算数 足し算(2) 9+9= 
--	---	--	--

学校名	岩倉南小学校	実践日／期間	令和3年11月8日
支援	授業公開 実践報告		

1 実践の概要

(1) 対象児童生徒

岩倉南小学校1年生 A(日本生まれ)ブラジル国籍

(2) 児童生徒の実態

日本生まれだが、家庭では母親と母語で会話していることもあり、語彙力が乏しい。また、日本語の受け答えもゆっくりとした言葉で、個別に声かけをしないと意思疎通できない。学習には前向きだが、ひらがなやカタカナの読みはまだ拾い読みである。マイペースな性格なので、大人数(教室)の学習ペースにはついていけない。日本語教室では個別に取り出しをし、マンツーマンの指導を行っている。本時では、音読の工夫や語彙の強化に重点を置いた授業実践を行った。

(3) 目標

- ア モジュール1 数の数え方や漢字での表記を知り、正しく読んだり、数えたりする。(日本語)
- イ モジュール2 物語の第二場面の音読をし、会話文の読み方を工夫する。(国語)
- ウ モジュール3 乗り物の名前と仕事を知り、名前と仕事を正しく結びつける。(日本語)
- エ モジュール4 繰り上がりの足し算を正しく計算し、ゲームをする。(算数)

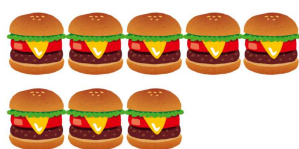
2 支援の方策と経過

モジュール1では、スライドとカードを使って一つ～十までの数え方を練習した。前時までにも何度か練習しているが、まだ完全に覚えることができていないため、何度も復唱したり、聞いて取ったり、漢字カードで並べ替えをしたり、色々な方法で練習をした。(図1)

モジュール2では、物語の一場面を音読練習した。会話文が誰の言葉なのかを考えながら、声のトーンを変えたり、動作をつけて読んだりして練習をした。挿絵を使い、実際に誰が話しているのかがわかるように視覚化して工夫した。(図2)

モジュール3では、次の単元で扱う、乗り物の語彙を学習した。それぞれの乗り物がどんな仕事をしているのかをクイズ形式で考えた。カルタの読み札を教師と交代で読みながら、音読練習も兼ねながらゲームで語彙をおぼえた。(図3)

モジュール4では、繰り上がりのある足し算を、カードを使って学習した。どちらのカードの答えが大きいかを、印字されたブロックを頼りに10のまとまりをつくって答えられるよう工夫した。(図4)



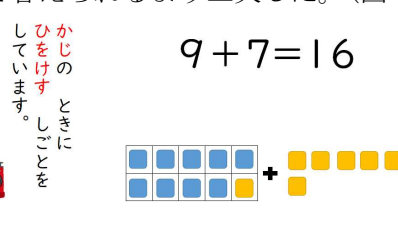
〈図1 かぞえかた〉



〈図2 くじらぐも〉



〈図3 のりもの語彙〉



〈図4 繰上足し算〉

3 成果と課題

一対一の授業で参観者がいたということもあり、音読のモジュールではいつもの楽しそうな彼女らしさを発揮させてあげられなかったことが反省点だった。彼女はまだ、文字を追っている段階なので、今回取り組んだような、自分で読み方を考えて音読するというのは難しかったように感じる。低学年のうちは、教師の真似をしながらいろいろな読み方を身に着けるといのも一つの方法だと思った。

一方で、授業を参観していただいた校長先生や担任の先生方からは非常に前向きな感想をいただいた。特に、覚えるまで何度も繰り返せる、子どもを飽きさせない、というモジュール指導の利点や音読の動作化、視覚化など、授業に対しての教材作成の丁寧さを褒めていただいた。教室では他の児童と同じようには活躍できない彼らが、日本語教室では満面の笑みで楽しく授業できているという点で日本語教室の存在の意義を高く評価していただけたように思う。彼らの心のよりどころになれる「楽しい日本語の授業」ができるよう続けていきたい。



〈足し算ゲームの様子〉

授 業 者	加 藤 洋 子	教科	社会・国語
授 業 日	R3年 11月 17日（水）5限 日本語教室（東側）		
単元・題材	公民分野 生産と労働 ・ おくのほそ道（本時 2／4）		
生徒の実態と 本時の探究	在日期間が比較的長く、日本語での日常会話に問題ない生徒である。差のある語彙量も、互いに補い合って学習する関係はできている。感情や意見を伝えることはできるが、書く活動になると乏しい表現や誤った文法が目立ち、苦手意識が高い。 岩倉日本語指導方式（モジュール式）により、社会の語彙（公民分野）と国語の「おくのほそ道」の2モジュールを学習する。社会などの教科用語は1年次から苦手だが、中学校のうちに、少なくとも教科書を自力で読む力をつけさせたい。国語では、前時に冒頭部分を読み、芭蕉にとっての旅は何かを掘り下げている。本時では、一人一人が芭蕉の吟行に心を寄せ、芭蕉になりきって旅路で俳句を詠んだ芭蕉の心を想像する。古典が身近ではない彼らの関心を強く引き出し、次時に取り上げる「夏草や～」の句で、芭蕉が涙した思いを深く読み取る足がかりにしたい。		
モジュール	時間	学 習 活 動	
社会 公民分野	10分	1 教科書 140～141 ページ「生産と労働」に関する漢字と語彙を学習する。 (1) 教科書の要約を読み、漢字と意味を確認する。 (2) 要約した内容を、自分の言葉で説明し合う。 教科書 140～141 ページを自分で読む力をつけよう。	
国語 おくのほそ道	40分	2 タブレットを用いて芭蕉を調べる。 芭蕉の生涯を振り返ろう。 - 芭蕉は何歳の時に旅に出たのか。 - 芭蕉は誰とともに旅をしたのか。 - 芭蕉はどのような旅のルートをとったのか。 3 旅の足取りを追い、各地で俳句を詠んだときの思いを想像する。 旅路での日記を想像して書こう。 (1) 旅のルートマップに芭蕉の俳句やイメージ画像を貼り付ける。 (2) 自らが芭蕉になりきって、俳句を詠んだ日の日記を書く。 (3) 書いた日記を共有し、なぜそのような思いに至ったのか説明したり、想像したことを伝えたりして、芭蕉の思いを探る。	

学校名 南部中学校 実践日 令和3年11月17日

支援 授業公開 実践報告 中3 公民「生産と労働」、国語「おくのほそ道」

1 実践の概要

(1) 指導内容 社会 公民分野「生産と労働」、国語「おくのほそ道」

(2) 対象生徒

3年生4名 A、B、C ブラジル国籍(日本生まれあるいは幼少期来日)、
D フィリピン国籍(小学校6年で来日)

(3) 児童生徒の実態

日常会話に問題はないが、学習語彙や日本語での表現力が乏しい。特に社会など学習に関する言葉や古典に出てくる単語などは難しく、関心も浅い。3年次から書く帯活動を進めているため、自分の意見や考えを書く際の苦手意識はなくなってきた。

2 本時の目標

(1) モジュール1 「公民」 言葉の意味と教科書の要約を知り、生産のしくみを説明する。

(2) モジュール2 「国語」 芭蕉の生涯を振り返り、旅路での思いを想像する。

3 授業の方策と経過

(1) モジュール1

- 教科書の要約画像によって理解度は増すようであった。「地産地消」などの社会の言葉を自分の言葉で説明することが難しい生徒もいたが、図からのアプローチだと意欲的に活動できた。

(2) モジュール2

- タブレットを用いて芭蕉の生涯について調べたが、日本語での検索学習になれておらず、こちらのねらいに沿った発言はあまりなかった。自分で調べることによって芭蕉の世界、「おくのほそ道」の世界へ、もっと入り込んでいくことを期待していたが、その点に関して課題が残った。
- 旅路を地図上でたどる活動や、代表句を地図上に貼る活動を通して、芭蕉の思いを想像させたかったが、今一歩寄り添えていないように思った。
- 自らが芭蕉になりきるよう、自分の名字に「芭蕉」を付けた名札を付けたり、旅笠をかぶったりして楽しく活動できるよう工夫をした。少しずつ思いをめぐらせることができたようである。芭蕉になりきって日記を書く活動では、自分なりの想像を膨らませることができた。
- 書いた文に文法的な間違いがあったが、作った文を互いに見直ししながら芭蕉の思いを想像することができた。文法的な間違いや文の構造をきちんと指導する時間をとることはできなかった。

図1

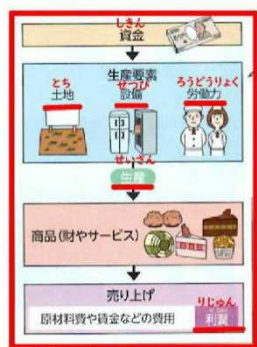
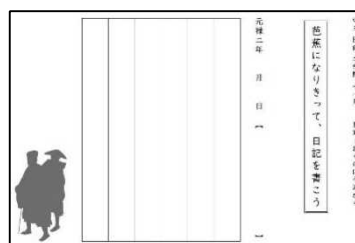


図2



4 成果と課題

となりの教室では初級日本語レベルの生徒を対象に、アプローチを変えて「おくのほそ道」を学習していた。上級日本語レベルである本授業について、授業を通して古典学習を深めることを意識して授業デザインと展開を試みたが、今ひとつ入り込めなかったと感じている。書く活動を帯活動として続けていたため、一定の目標は達成できたが、古典学習としての深め方については、教科横断的に歴史学習を行うなど、さらなる工夫が必要であると思った。

マイプラン

日本語初級 3年（日本語教室 西側）

授 業 者		前 田 栄 子	教科	日本語・社会・国語
授 業 日		R3年 11月 17日（水）5限	日本語教室（西側）	
単元・題材		おくのほそ道 （本時 2／4） ・ 歴史 元禄文化		
生徒の実態と 本時の探究		昨年12月にパキスタンから来日した3名で、日本語学習はまだ1年に満たない。そのため、日本語は英語を交えての日常会話程度で、漢字の力は小2である。日常的には平仮名を使うのみである。日本の歴史や文化についての知識や理解は浅く、あまり興味がない様子である。 岩倉日本語指導方式（モジュール式）により、「おくのほそ道」は日本語・歴史・国語の3モジュールを用いて学習する。古典の学習は彼らにとってハードルが高いが、本学習では松尾芭蕉がたどった旅路を地図で辿り、写真や当時の旅の絵を見ながらどういった旅路であったかを知る手がかりとする。また現在と過去の旅の違いについて考え、どのような困難があったかを想像してみる。松尾芭蕉という人物を理解した上で本文に入り、歴史的背景を本文の学習と絡めて、教科の横断的学習をすすめる。松尾芭蕉の生きた時代の生活や人々の暮らしを知ることで芭蕉の想いに触れる。		
モジュール	時間	学 習 活 動		
日本語	10分	1 「おくのほそ道」冒頭部分を、古典の言葉に注意しながら読む。 漢字の読み方やことばの意味を知ろう。 (1) 前時で学んだ歴史的かな使いについての復習をする。 (2) 新出漢字の意味をタブレットで調べて書く。 (3) 冒頭部分を読む。		
社会 地理歴史分野	10分	2 江戸時代に発展した元禄文化に触れ、松尾芭蕉の生きた時代の歴史的背景を知る。 江戸の暮らしや文化を知ろう。 ・ 文化：歌舞伎・人形浄瑠璃 ・ 江戸の暮らし：衣服・交通手段・食事		
国語 おくのほそ道	20分	3 松尾芭蕉がたどった道を追い、訪ねた場所を地図上にマークする。 (1) 江戸から東北、北陸と辿り、最終の地・大垣市までの距離約2400キロの道のりを赤線で引いたり、旅の目的地の資料を地図上に張ったりして、考える手がかりにする。 (2) なぜ松尾芭蕉は旅に出たのかを考え、発表し合う。 46歳で、150日かけての旅路にむかった松尾芭蕉の想いを想像しよう。 4 俳句を詠んでみる。 (1) 吟行について知り、修学旅行で楽しかったことを思い出す。 (2) 季語や五・七・五、俳句のルールを知る。 (3) 俳句を詠み、発表し合う。		
ふりかえり	5分	5 本時で分かったこと・理解したことや感想をワークシートに書く。		

学校名	南部中学校	実践日／期間	令和3年11月17日
支援	授業公開 実践報告 中3 歴史「元禄文化」、国語「おくのほそ道」		

1 実践の概要

(1) 指導内容 日本語「漢字」、歴史「元禄文化」、国語「おくのほそ道」

(2) 対象生徒

3年生3名 A・B・Cともに令和2年12月来日、パキスタン国籍

(3) 児童生徒の実態

対象生徒はまだ来日して1年に満たない生徒3名である。英語でコミュニケーションが取れるため、日本語に英語を交えて授業を行っている。今まで日本文化や歴史に触れる機会がほとんど無かったため、学習におけるその背景となる知識も乏しい。

2 本時の目標

(1) モジュール1 「日本語」 漢字の読み方や言葉の意味を知る。

(2) モジュール2 「歴史」 江戸の暮らしや文化を知る。

(3) モジュール3 「国語」 46歳で、150日かけての旅路にむかった松尾芭蕉の想いを想像する。

3 授業の方策と経過

(1) モジュール1

- 冒頭部分は、時々詰まりながらも歴史的仮名遣いに注意して音読することができた。

(2) モジュール2

- 元禄文化や庶民の暮らしを知り、質問を交えながら興味深く学習できた。

(3) モジュール3

- 芭蕉が立ち寄った場所に、三人で話し合いながらシールを貼っていくことができた。(図1)
- 個々に書いた透明シートに、正しいルートの図版を重ねて、芭蕉が多くの場所を訪ねたことを確認することができた。(図2)
- 松尾芭蕉は交通に不便な時代、なぜ命の危険を冒してまで旅に出ようと思ったのかについて、じっくり考えて発言することができた。
- まず吟行を知り、修学旅行を思い出しながら俳句を詠んだ。ホワイトボードに手がかりとなるカードを貼ったが、それを見ながら俳句を詠むことができた。(図3)
- 本時の感想や分かったことをワークシートに記入する時間が取れず、時間配分に問題があった。



図1



図2

4 成果と課題

日本人でも日常的にほとんど使わない歴史的仮名遣いや俳句を詠むこと、日本の歴史の学習を進めるうえで、それに関連した学習も進めることができた。たとえば江戸を知るため近代までの元号を覚えたり、松尾芭蕉の歩いたルートを辿るため日本の都道府県を学んだりした。江戸の民衆の暮らしや文化についても、着物や履き物など身近なものの違いや食事に触れていくうちに日本文化についての理解が進んだと感じた。俳句を詠む学習においては、生徒がまずどんな句が詠みたいのかを考え、それに合った日本語を考えていた。生徒AとBはこちらが提示した課題に沿った句が仕上がったが、生徒Cは詠みたい句の内容から考え、それを法則に従って日本語を当てはめて詠んでいたためか課題とは離れた句になったものの、クオリティの高い仕上がりに驚いた。それぞれが難しい課題ながら精一杯取り組むことが出来た。

今回の授業公開でたくさんのご指導を頂くことができた。これからの課題としては、もっと生徒が活動することができる内容を考えていき、答えを各自で導き出すことができるよう工夫していきたい。

授 業 者	海 野 怜 子	教科	社会・国語
授 業 日	R3年 11月 17日（水）5限 南多目的室（東側）		
単元・題材	アフリカ州（本時 1／4） ・ 今に生きる言葉（本時 2／4）・		
生徒の実態 と 本時の探究	対象生徒の2名は、ともに在日期間は1年未満であるが、理解力や習熟度の差が大きい。日常会話は少しずつ習得しつつあるが、在籍学級の授業を理解するのは難しい。日本語教室では、生徒間の共通言語を用いて、教え合いや相談の時間を設けている。また、英語も理解できるため、指導の中で適宜使用し、正確な理解につながるようにしている。 岩倉日本語指導方式（モジュール式）により、社会の語い（地理分野）と国語の「今に生きる言葉」の2モジュールを学習する。社会では、アフリカ州の地形と教科用語を学習する。国語では、前時に「今に生きる言葉」の導入部分を学習し、「矛盾」の書き下し文を音読している。リライト文や画像から、「矛盾」の意味を正しく理解し、伝え合う活動を通して、日本語での基本的語いを自ら獲得しようとする心を育てたい。また、故事成語の成り立ちを知ることによって日本語の面白さに気づかせたい。本時で「矛盾」の意味を正しく理解することで、次時の体験文の作成へとつなげたい。		
モジュール	時間	学 習 活 動	
社会 地理分野	10分	1 アフリカ州の位置とその地形について知る。 アフリカ州の山脈や川などの名前や場所を覚えよう。 (1) 世界の6つの州の名称とアフリカ州の位置を確認する。 (2) 画像を見ながら、アフリカ州の地形に関する名称や位置を知る。 2 1で学んだ地形の名称と位置を確認する。 (1) 2人で地形の名称について伝え合う。 (2) 地形の名称のカードをアフリカ地図の適切な場所に貼る。	
国語 「今に生きる 言葉」	40分	3 「矛盾」の現代語訳のリライト文を読み、内容を理解する。 (1) 「矛盾」に関する言葉の意味を知る。 (2) 教師の音読をリピートする。 (3) イラストをストーリーの順に並び替える。 (4) イラストをヒントに内容を読み取り、説明し合う。 「矛盾」の内容を理解し、自分の言葉で伝えよう。 4 「矛盾」という言葉の意味の理解を深める。 (1) 「矛盾」に関連した画像を見て、矛盾点を個々で考える。 (2) 矛盾点を発表する。	

学校名	南部中学校	実践日／期間	令和3年11月17日
支援	授業公開 実践報告		

1 実践の概要

(1) 指導内容 社会「アフリカ州」、国語「今に生きる言葉」

(2) 対象生徒

1年生2名 A ネパール国籍、B パキスタン国籍（ともに小学校6年生で来日）

(3) 児童生徒の実態

2名とも日本語でのコミュニケーションが徐々にとれるようになってきてはいるが、学年相応の学習はまだ難しい面があるため、日本語指導と並行して、現学年の教科の内容を取り入れた指導を行うようにしている。

2 本時の目標

(1) モジュール1 「地理」 アフリカ州の位置と地形を表す用語が理解できる。

(2) モジュール2 「国語」 「矛盾」の内容を理解し、自分の言葉で伝えることができる。

3 授業の方策と経過

(1) モジュール1

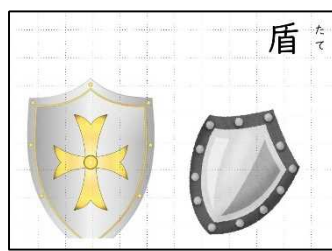
- ・ 山脈、砂漠などの地形を表す用語をピックアップし、画像を使って視覚的に理解できるようにした。その結果、用語の意味を正しく理解できた様子であった。(図1)
- ・ 地形の名称が書かれたカードを地図上の正しい位置に貼るという活動を取り入れたがところ、お互いに相談しながら、積極的に取り組むことができた。

(2) モジュール2

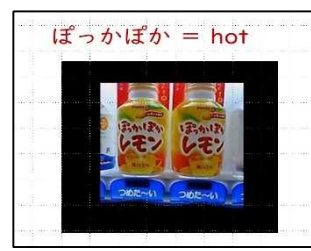
- ・ 「矛盾」の現代語訳は、ストーリーを理解しやすいように、リライト文を使用した。
- ・ 文中の言葉の意味を正確に理解できるように、画像を使ったり、実際に体験する場を設けたりした。体験して学んだ言葉については、特に印象に残ったようであった。(図2)
- ・ 「矛盾」のイラストをストーリーに合わせて並べ替える活動を取り入れ、内容理解につなげることができた。
- ・ 「矛盾」の例を画像で示し、その矛盾点を自分の言葉で伝え合う活動を行った。「矛盾」という言葉の意味の理解を深めることができた。(図3)



〈図1〉



〈図2〉



〈図3〉

3 成果と課題

モジュール1では、地球儀を使ってアフリカ州の位置が視覚的に把握できた様子であった。また、地理分野を通して使用される地形を表す用語についても、画像を用いてインプットしたことにより、正確な理解につながったようであった。アフリカ州の中の様々な地形の固有名詞については1回の指導での定着は難しいため、繰り返し指導していく必要がある。

モジュール2の「今に生きる言葉」は、日本語初級の生徒にとって難しい單元ではあるが、スモールステップで授業を進めたことにより、「矛盾」のストーリーやその言葉の意味が正しく理解できたようであった。

初級生徒の教科指導において、現学年の内容を取り入れようとする、教師の発話が多くなってしまいがちである。しかし、今回のように、生徒の日本語力に合わせた工夫をすることによって、生徒のアウトプットを多く引き出すことができる。今後もアウトプット中心の授業を目指して授業づくりをすすめていく。

◎ 視察・講師依頼 問い合わせ 令和3年度

○ 愛知淑徳大学	視察・プレススクール見学
○ 愛知県多文化共生推進室	視察
○ 岐阜聖徳学園大学	視察
○ 大阪市難波中学校	教材使用許可依頼
○ 愛知教育大学 学生	見学
○ 愛知県立大学 学生	見学